



根源につながって生きる

廣池千九郎エピソード 善を積み徳を余し、
子孫道を得る

いのちのルーツにつながり

今年も季節は夏となり、お盆を迎えようとしています。この時期は、自分の祖先やルーツ（根源）に思いが至ります。

私たち人類は、生命の進化の流れの中で誕生し、肉体と精神を受け継いで地球上で生存し、発展してきました。私たちのいのちのルーツは自然界にあり、太陽光や水などの自然の恵みがなければ、生きることができません。

また私たちは、先人が築き上げてきた文化や文明から多大な恩恵を受け取って生活しています。さらに、国や地方公共団体による支援を受けつつ、家庭や社会の中で暮らしています。このように、私たちはさまざまな「つながり」の中で生存を全うしているのです。

いのちにはルーツがあり、現在までつながって生きていますが、立場を変えれば、祖先の子や孫といった未来世代へのいのちを受け渡すため、懸命な努力を重ねてきたということなのです。

いのちが、受け継ぐ側から受け渡す側へと立場を変えながら連続とつながっていることを考えると、次は自分が未来世にも道理である。（中略）善を積んで徳を残す努力をしなければ、決して立派な子孫は生まれてこない』（廣池千九郎エピソード第2集『慈悲の心を伝える』モラロジー研究所、五九〜六一頁）

親祖先が積み上げ、私たちが受け取っている「徳」という恩恵は目に見えないため、普段は気にも留めません。しかし、今、こうしていのちがあり、横道にそれず安心して人生を全うできているのはなぜか、を再確認することも大切です。

恩を知ると元気になる

伝統の苦勞と恩恵を知る。そのことは、自分の中に大切にされているという温かな実感を生みます。モラロジー研究所の常務理事などを歴任した故・松浦勝次郎氏は、伝統の恩恵を知ること、人生は大きく変わると言います。

「私がこれまで、多くの若い人たちと共に学ぶ中で目の当たりにしてきたことは、このような根本の恩に気づけた人は、気づいたただけ、人間として確実に変わるといえることです。何よりも、伝統の恩を恩と感じることは、人の心を素直にして元

代へ、「何を」「どのように」受け渡すかについても考えておく必要があります。そのために、まずは前の世代から受け取ったものが何であり、どのような意味があるのかを確認する必要があります。そこで、「恩恵」という視点から私たちの人生について考えてみましょう。

祖先が積み上げたもの

総合人間学モラロジーを創建した廣池千九郎（一八六六〜一九三八）は、門人の松浦香氏に対し、次のように語っています。「祖先辛苦して家を成し、後昆（しこん）これに安んず

善を積み徳を余し、子孫道を得る

『祖先の祖という字はオヤと読み、先の親という意味になる。（中略）祖先となり、子孫から崇敬されるような運命を開くには、形と精神の両方の徳が必要になるが、家を成すだけでも容易ならぬ苦勞がある。この家とは、大工さんが建てるハウスのことではない。（中略）

近ごろのサラリーマンの家庭には、神仏も祖先も祭っていない家が多くなつたが、それでは心貧しい人が育ってしまう気がします。伝統の恩を知り、感じることは、自分が真に大切にされ、守られていることを知り、実感することであり、それは自分が大切な存在であることを自覚することになります。自分自身が大切に守られ、育てられている大切な存在であることを自覚して、はじめて真に自分を大切にすることができ、また、他者も大切な存在であると思うことができるのです』（『真に意味ある生きる道』モラロジー研究所、一四五頁）

伝統の恩を自覚することによって、自己を大切にできるようになる、という指摘は、さまざまなつながりの中で生きる私たちにとって、決定的に重要なことです。自分のルーツを知るとは、自分自身で完結するのではなく、他者のルーツや人生にも思いを馳せることにつながる、このように考えることができるでしょう。いのちを生かすとは、何か新しいことを始めたり、人生を前進させたりすることだけではなく、いのちがここへたどり着くまでの努力に感謝することから始まるのかもしれない。今の時期だからこそ、自分のルーツや周りとのつながりについて思いを馳せてみたいものです。（本誌

真に意味ある
生きる道
『道徳科学の論文に学ぶ』
モラロジー研究所 本体1,700円+税

お求めは
巻末の専用ハガキ、
または▶から